
ガラス越しの両手

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラス越しの両手

【Nコード】

N3130W

【作者名】

有里

【あらすじ】

サイトより転載。

研究室の中にはコポコポと水と空気が混じる音が響く。その他、機械類の規則的な起動音。天井まで届くくらいに大きな水槽には絶えずきれいな水が注ぎ込まれている。その為のろ過装置の点検を終えて、梯子を下りて床に足を付ければ、さっきまで見下ろしていた筈の水槽の中身が、逆に俺を見下ろすように、圧迫するように目の前に広がっている。その水槽の中身、水の中でゆらゆら揺れながら、

実験体No.0109が静かに俺を見ていた。……研究対象とその
研究を手伝う助手の話。

研究室の中にはコポコポと水と空気が混じる音が響く。その他、機械類の規則的な起動音。

天井まで届くくらいに大きな水槽には絶えずきれいな水が注ぎ込まれている。その為のろ過装置の点検を終えて、梯子を下りて床に足を付ければ、さっきまで見下ろしていた筈の水槽の中身が、逆に俺を見下ろすように、圧迫するように目の前に広がっている。その水槽の中身、水の中でゆらゆら揺れながら、実験体No.0109が静かに俺を見ていた。

「……なに見てんだよ、」

睨んでやれば、そいつはびくつと身を縮めるようにして、水槽の中に設置してある草の茂みの中へ隠れるように引込んだ。しかしひよこつと顔だけを出すと俺を見詰め、《な、に、み、て、ん、だ、よ》と俺の口の動きを真似て、薄い肌色をした唇を動かした。パクパクと動く口は泡を吐くこともない。こいつは俺たちのように言葉を喋れないのだから。

「……意味もわかんねーのに真似すんじゃねえよ。」

いや、いつもの餌の時間や実験の簡単な説明は何となく伝わっているみたいだから、意味は分かってるんだろうけど。相変わらず茂みから顔だけ出して俺をじっと見詰めているそいつに溜息をついてデスクのイスを水槽の前まで持ってきてそこに座る。

「……お前さあ、……こんなところで飼われてて、……死にたくなねーの。お前の兄弟はみんな死んじゃまって、一人になってさ、……」

No. 0109は、人間と人魚のDNAを掛け合わせて創られた人魚モドキ、人間モドキだ。

足は二本あって、見た目は全く人間と変わらないけれど、水の中で呼吸が出来る。今の所はその他に特別な身体能力は確認できてない。なにせ、一人の人間の形に成長するまでに死んでしまうのが殆どで、1000以上あった実験体も次々に押っ死んで、何とか生き残っているのはこいつただ一人なのだ。ただ体の大きさから、人間の子供の16〜17歳くらいに見えるが、まだ2歳になったばかりで、最近になってようやく、体に負荷を掛ける実験を色々試せるようになったばかりだった。

「お前見てると、何か、俺あ嫌な仕事をしてるみたいに思えて、……」

そう、こいつらは、見た目は普通の人間だった。世間知らずなガキ、生意気なガキみたいな顔をして。それが、水槽の水の中で素っ裸で平然と暮らしてる。いや、飼われてる。

「……」

俺はふと立ち上がると、白いバスタオルを持って梯子を上った。水槽の蓋についている窓をスライドさせて、中にタオルを落とす。それはゆらゆらと上の方を漂っているだけだったから、コツコツとガラスを叩いて、タオルを指差し、No. 0109に取りに来るよと言いつけた。

おずおずと水の中をやって来たそいつは、俺が落としたタオルをびくびくしながら掴む。一つ一つの動作を俺に確認するように、ちらちらと俺の方を振り向きながら。そして最後に、これどうするの？ と不安な眼差しで俺を見た。

俺は梯子から下りて、水槽の正面に立つ。下の方に来るように指示すると、そいつはすうつと水を蹴って俺の前にやって来た。

「ここに立って。…それでそれを、こう、…そう、横に持って。…そのまま、こう、」

自分の腰回りに手を当てて、何度か手を交差させる。

「違う違う、こう、…こうして、そうだな、そこで結んでみるよ。…ん、上手い。それでいい。」

こいつの肌は、日に焼けることもなければ特別に鍛えている訳でもないからやけに白い。ただ貧弱とも言えない、ただ真白だけじゃなくて、陳腐な言い回しだがスベスベと陶器のようだ。下半身が隠れるよう腰元に巻いたタオルから、普通の15、6歳の少年に比べれば随分と不健康そうに見える細い脚がすらっと伸びている。

「……………」

黙ったまま水槽の前に置いたイスに腰掛ける。

急に黙り込んだ俺に、No.0109は少しだけ首を傾げて、ちらつと俺を見てちらつと視線を外して、ただどまたちらつとこつちを見る。イスの背凭れに腕を乗せて頬杖をついた俺に、No.0109はパクパクと口を動かした。…… あ、り、が、と、…？俺は全身の力が抜けたような気がして、思わず笑ってしまった。

「あは、ははッ…お前、お礼が言えるんだ。……………」

No.0109が、大口を開けて笑い出した俺をじっと見詰め、同じようにはははと笑い顔を作った。小さく尖った歯が見える。

頬骨が高く笑窪がくつきりと皺を作る。なんだ、可愛い顔してるじゃん。

「……………」

突然、No.0109は丸い目をすつと弓形にして綺麗に笑った。俺は無意識に水槽へ手を伸ばしていて、コツンと冷たいガラスに手がぶつかって初めて、こいつには触れられないのだとぼんやり思った。No.0109は俺の手をまじまじと見て、少しして、そろそろと右手を持ち上げて、そつ…と手の平を俺の手の平に重ねるように動かした。俺のごつごつした汚い手と、No.0109の白い手が重なったように見えて、だけど、その間には分厚いガラスがあるんだつた……………」

「……………」お前、……………」

No.0109がきゅつと口を閉ざしたまま、じつと俺を見詰める。その薄い灰色の瞳に、これだけ近付けば俺の顔が映って見えるんじゃないかと思った。No.0109は眉を八の字に寄せて、少しだけ寂しそうに笑った。

「…出たいか? …お前、……………」

大きな目が尚大きく見開かれる。

「はは、…何言ってるんだ、俺、……………」

ガラスについた手の平がじわりと熱くなって、汗ばんだ気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3130w/>

ガラス越しの両手

2011年11月13日17時01分発行